

和田麿寺出土鴟尾の復原修理

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

1974年に実施した和田麿寺第1次調査で発見された鴟尾について、復原修理を行った。3型式5個体分の鴟尾片が出土したが、今回はこのうち、残りのよい1号鴟尾を復原した。

1号鴟尾は頭部下端の左右を欠くなど、若干の欠損部分があるとはいえ、全形をうかがうには絶好の資料である。細片を除いて55片にわけて残存し、破片の総重量は136kgであった。

復原に先立って、破片にはバインダー17原液を減圧含浸させ、個々の破片を強化した。接合にあたっては、破片を数個ずつ接合してブロックをつくり、これを順次組立てた。接着には強度と粘りのあるエポキシ系接着剤（アラルダイト・ラビッドタイプ）を使用した。

組立てはヒノキの台板(120cm×90cm×5cm)上で行い、台にのせた状態で運搬・展示できるように配慮した。この台に高さ100cm、径10cmの支柱を取付け、これからさらに枝木を張出させた。これは鴟尾の胴部および尾部の荷重を内側から支え、分散させる目的である。ブロック状に接合した破片は、各々で相当の自重をもち、組立途中での歪みを防ぐため、全体を短時間で組上げることが要求された。その際、接合面積の小さい部分では、ステンレス製針金(径2mm)を柄・鏝として用いながら補強した。欠損部の補修には石膏を充填し、欠損部分が大きいときにはステンレス針金を縦横にわたして心とした。また、胴部前端の下に木心をいれて補強することにした。この過程に要した接着剤は約6kg、石膏は約7kgに達した。

組立がおわったのち、接合部の目地埋めなど細部の仕上げを行い、石膏補修部分に着色を施し、復原修理は約2ヶ月をへて完了した。着色顔料は水彩絵具、砥粉、木灰などである。

つぎに、復原後の計測値を記しておく。

総高	127.7cm	基底部後端幅	72cm	基底部前端幅	48.5cm
頭部高	46.5cm	基底部長径	74.5cm	重量	約150kg

復原の完了後、写真測量を行った。遺物の撮影に際しては、投影面をどこに設定するかが問題になる。今回は鴟尾頂部にあるヘラ画き線と底部中心とを結び、これを基準にした。

正面図をみると、中心線がわずかに逆S字形に彎曲しているが、製作時に生じたものかどうかは検討を要する。左側面図において、復原部分では等高線が規則的に表現され、他の部分と明確に区別できるのは注意をひく。撮影および図化の仕様はつぎのとおりである。

カメラ	クローズアップレンズ No	図化縮尺	1:2
乾板	イルフォード 9×12c n	等高線	正面 2.5mm, 側面 2mm
写真縮尺	20	作業機関	写真測図研究所
図化機	1 ステレオメトログラフ E型		

(西村康・甲斐忠彦・山田猛)

和田庵寺嶋尾